

# 留学生科目における語彙指導の展望

田 伊 德 中  
辺 藤 田 條  
和 誓 清  
子 子 惠 美

## 序

本稿は、2007年度「留学生科目における語彙指導の工夫」、2008年度「留学生科目における語彙指導の研究」に引き続いての日本女子大学留学生科目担当者による語彙指導の実証的研究の報告である。外国語学習において、いかに上達しても、語彙の学習には限りがない。上級の学習者ほど語彙力の差が、日本語理解と表現の幅に大きく係ることを、痛感しているだろう。

日本女子大学の外国人留学生は、日本語教育の一般的なレベルからいえば、上級である。留学生全員が、入学したばかりの4月から日本人と一緒に講義を受け、7月にはいくつかの授業において日本語においてレポートを課せられる。留学生のほとんどがこれらの作業を自力でこなそうとはするのだが、作成されたレポートを見ると、語彙の不足は否めない。作文から論文への脱皮が語彙面では特に望まれる。また、作文だけでなく、読解教材も論説や学術的な論文が対象となり、理解に必要な語彙は、さらに増大するのである。

このような状況に置かれた学習者を指導する立場の教師が共同で、語彙教育の課題を整理し、解決策を考えることを目的として、本稿は科目担当者の共同執筆という形式を採ってきた。本年度は、伊藤誓子は、「強意・程度を表わす命題内副詞のコンテキストとの関係」というテーマで文章表現における副詞の使用を研究し、徳田恵は、「講義の聞き取りにおける付随的語彙学習」というテーマで、聞き取りにおける語彙教育の問題について分析した。田辺和子は、中條清美と共同で、パラレルコーパスの教育的利用の工夫について考えた。この三つの異なった視点から考えることによって、語彙教育は、4技能を伸ばす教育目標を明確に設けて、文法的な知識と関連を確認しながら、コンテキストの中で多角的に進めていかなければならないことが明確にできたとおもう。

この共同執筆の成果を踏まえて、留学生科目の語彙指導の向上に努めるつもりである。

# 1. 講義の聞き取りにおける付随的語彙学習 ～文脈中の語意説明との関係に注目して～

徳 田 恵

## 1.1 はじめに

大学に入学したばかりの留学生は、アカデミック・スキル養成を目的とした日本語の授業を受けつつも、それと同時並行で一般科目や専門科目の講義も受講し、理解しなければならない。つまり、アカデミックな日本語能力が十分備わってから日本人学生と同じ授業を受けるのではなく、講義を受けながら日本語能力を伸ばしていくことが必要とされているのである。読解や聴解などの内容理解を目的とした活動の中で副次的な結果として語彙を学んでいくことを付随的語彙学習というが、大学に入学したばかりの留学生は、内容理解を目的として講義を受けながら、まさに付随的語彙学習の必要にも迫られているわけである。

筆者は口頭表現養成のクラスを担当していたため、入学してきたばかりの学生がどの程度講義を聴き取れているのか、また付随的語彙学習がうまくできているのか、更に学期が進むにつれて教育の成果が現れているのかが大きな関心事であった。講義を聞くことで語彙知識が深めていけるのであれば、こういった条件の下でそれが可能なのかを知ることは重要である。また、深めていけないのであれば、何が障害となっているのかを知ることも重要であろう。今後アカデミック・スキルとしての口頭表現養成のクラスのカリキュラムを改善していくためにも、まずは学習者の現状を知るための研究が必要だと考えた。

## 1.2 先行研究

徳田（2008）では、講義の聞き取りにおいて付随的に語彙知識を深めて行くことが可能かどうかを検証した。ここでいう語彙知識を深めるとは単に語の意味（以下、語意）を記憶することではなく、未知語であったものが音韻や形を認識するレベルから意味を覚え、さらには用法を理解し正確に産出できるレベルまで進んでいくことを指す。対象者は本学に留学している一年生5名で、一学期目に調査を行った。対象者の日本語能力は入学時のアンケートによると日本語能力試験の1級、あるいは2級レベルで、かなり個人差があった。調査の材料は講義形式の語学教材を用いた。聴解前と聴解後とで語彙知識に差があるかを調査した結果、わずかではあるが講義を聞くことで語彙知識を深められる可能性があることが分かった。また、その条件として講義の内容がよく理解できていることと、対象語が持つ音韻情報の処理が重要であることが示された。

徳田（2008）の結果のように、語彙学習には音韻情報や形態素情報など語に内在する情報の処理に影響されるが、その他にその語を取り囲む言語的文脈も影響を与えるまた一つの要因である。しかし、徳田（2008）ではこうした言語的文脈の影響については検討されていない。文脈情報と語彙知識を深められたこととの間に何らかの関係があったのかどうか不明である。そこで、本稿では徳田（2008）におけるデータを、文脈と語彙学習との関係という観点から再分析を行うこととする。

認知心理学の研究では、ある語を覚えるのに、その語に付加される情報の量が影響を与えるこ

とが明らかにされている（豊田 1995, 27-32）。この研究は文脈中の情報量に関するものではないが、覚えようとする語と付加される情報の量の関係を扱っている点で参考になる。豊田（1995, 27-32）は、覚えようとする語（以下、記銘）に頭の中での検索ルートが増えれば、よりそれらの語が覚えやすくなるだろうと予想し、その検索ルートを増やすための情報として連想語を付加するという実験を行った。日本語を母語とする専門学校生30名を対象に、記銘語に対して連想される語を20秒間で無制限に報告させる、という課題を行った。その課題後の自由再生テストでは、記銘語と連想した語を思い出した順に報告させた。その結果、連想する語が少ない場合には記銘語の再生率が高く、連想語数が中程度の場合には低くなり、更に連想語数が増加するとまた再生率が高くなった。また、先に連想語を再生し、その連想語に対応する記銘語を再生する場合には、連想語の増加につれて上昇することが分かった。これにより、検索ルートという情報が増えれば、より語が覚えやすくなることが実証された。

第二言語（以下L2）としての日本語の語彙学習の研究において、谷内・小森（2009）がモンゴル語を母語とする中上級学習者35名を対象に未知語の意味推測における文脈量の効果を検証している。文脈量は、未知語のみの提示、単文提示、複文提示の3条件で、複合動詞の意味を多肢選択方式で推測させた。分析の結果、日本語能力が高い学習者は文脈量に応じてより正確な意味を推測することができたが、日本語能力が低い学習者は文脈量が増えても正確な推測には結びつかなかった。この結果が語彙知識を深めることにどう結びつくのかは今後の研究が待たれるが、少なくとも語意理解の段階では、文脈からの情報量が日本語能力の高い学習者には有効に働くといえよう。

こうした研究から、L2学習者にとっては、まずは文脈中に対象語に関する何らかの情報がなければ語彙知識は深まりにくそうであり、その量は多い方がよさそうである。しかし、上記の研究は文字情報の提示による実験であり、その結果がそのまま聴解の場合に当てはまるかどうかは定かではない。L2日本語の分野では、聴解における語彙学習と文脈の効果を検討した研究は管見ながら見あたらない。よって、本稿はこの点を探ろうとするものである。

本稿は徳田（2008）のデータの再分析なので、実験的に検証することはできないが、文脈と語彙学習との間にどのような関係があるのか仮説を立てることを目的とする。具体的には、次のように研究課題を設定した。

研究課題 講義の聞き取りにおいて文脈中に語意の説明がある語のほうが、無い語より語彙知識は深まるか。

## 1.3 方法

### 1.3.1 調査機関

本調査は、本学留学生科目の日本語 I-Cクラスで行った。日本語 I-Cはアカデミックな口頭能力の養成を目的としたクラスであるが、その基礎となる聴解力向上のため、前期は主に講義の聞き取りやノートテイキングの指導が行われていた。

### 1.3.2 調査対象者・調査期間

本研究では、日本語 I-Cクラス受講生11人のうち、調査の全過程を受けた5名（ビルマ語話

者3名、中国語話者・韓国語話者各1名)のデータを分析対象とした。

調査期間は、2008年の6月から7月にかけてである。

### 1.3.3 実験手続き

実験の流れを表1に示した。講義の聴解の一週間前に語彙力を測定するために事前テストが行われた。実験当日は、まず講義の聴解と内容理解問題を行い、その後、干渉課題として読解と誤文訂正を行った。この読解文と誤文訂正には、対象語は含まれなかった。その後、講義聴解による語彙力の伸びを測定するために直後テストを実施した。

表1 実験の流れ

時期	所要時間	実施内容
1週間前	約30分	事前テスト
実験当日	約50分	講義の聞き取り 内容理解問題
	約20分	干渉課題
	約20分	直後テスト

事前テストと講義の聴解を行う際に、対象者には後で語彙テストがあることは知らされなかった。

講義を聴く際にメモをとることができたが、内容理解問題終了後に回収された。

### 1.3.4 測定方法

#### 1.3.4.1 語彙力

調査対象とした語彙は、後述する聞き取り材料の中から講義の内容に関係が深いと思われる39語を選んだ。事前テストでは、対象語への注意をそらす目的で10語ディストラクターを加えた。直後テストは、時間の関係上対象語のみで実施した。なお、分析の際には、事前テストから実験当日の一週間に筆者の担当授業で出てきた2語を除き、37語を対象とした。

実験の事前と直後における語彙力の測定には Paribakht & Wesche (1997) の Vocabulary Knowledge Scale (以下VKS) を用いた。VKSとは、表2に示した5段階評定によって、ある語についてどの程度の知識があるか調査対象者に内省報告してもらい、それを表3の評定基準に従って得点化していく、という方法である。なお、本研究では活動が聴解であるため、VKSの内省報告のカテゴリーI~IIIの「見たことがある」に「聞いたことがある」を加えた。

表2 Vocabulary Knowledge Scale (Paribakht & Wesche 1997)  
訳：谷内 (2003)

内省報告のカテゴリー	
I	以前にこの語を見たことがあるかどうか思い出せない。
II	以前にこの語を見たことはあるが、意味は分からない。
III	以前にこの語を見たことがある。この語の意味は_____ だと思う。
IV	この語の意味を知っている。意味は_____ である。
V	この語を使って文をつくることできる。_____
※Vを回答した人は、IVについても回答すること。	

表3 Vocabulary Knowledge Scaleの評定基準 (Paribakht &amp; Wesche, 1997) 訳: 谷内 (2003)

内省報告のカテゴリー	得点	得点の意味
I	→ 1	対象語へのなじみが全くない
II	→ 2	対象語へのなじみはあるが、意味は分からない
III	→ 3	同義語や第一言語での翻訳を報告できる
IV	→ 4	文の中で対象語を意味的に正しくつかうことができる
V	→ 5	文の中で対象語を意味的にも文法的にも正しくつかうことができる

語彙テストの実施は、筆者が対象語を読み上げ、調査対象者はまずそれを書きとってから、VKSのどの段階にあるかを回答する形で行った。書き取る際には、漢字で書いても平仮名で書いても良いこととした。こうした書き取り形式にしたのは、本研究では講義の聞き取りの際には文字情報は一切提示されないからである。これは音韻情報によって語彙学習が可能かどうかを調査するためである。よって語彙テストにおいても文字情報は提示しないこととした。

また、日本語は同音異義語が多いため、音韻情報だけの提示だと複数の語を想起する可能性がある。そこで、「回答は一つとは限りません。頭に浮かんだもの全て書いてください」と教示した。

得点化の際には、同音異義語を答えていた場合には、対象語を知らないとみなして、1点とした。なお、複数回答についてであるが、本研究調査対象者の回答には複数回答は見られなかった。

内省報告カテゴリーⅢとⅣでの対象者の第一言語の回答については、母語話者に翻訳を依頼した。中国語と韓国語については日本語教育を専攻する大学院生に、ビルマ語は日本滞在7年で日本企業に勤務する母語話者の方（日本語能力試験の1級取得、日本の大学を卒業）に翻訳してもらった。

#### 1.3.4.2 内容理解

本研究は、付随的語彙学習の枠組みにおける調査である。そのため、調査対象者には講義の内容理解を目的として聞き取りをしてもらった。

聞き取り材料とした講義には、『講義を聴く技術』（産業能率大学日本語教育研究室編 1988）から、どの対象者にも背景知識に偏りが無く、興味を引きそうなものを基準に次の四つを選んだ。超伝導に関する講義（以下講義1）、産業の組みかえに関する講義（以下講義2）、瞳の構造に関する講義（以下講義3）、バイオテクノロジーに関する講義（以下講義4）である。

内容理解テストとして、内容の正誤を問う問題が課された。講義を聞いた後で文が読み上げられ、対象者は正しければ○、間違っていれば×で答えた。問題数は、講義1～3までは各5問、講義4は15問あった。

#### 1.3.4 分析方法

講義のスクリプトから文脈中に語意の説明に関する記述があるか無いかを判定し、その有無ごとに得点の伸びを比較する。本研究は、対象者が5名と小規模データであるため、各対象者の得点と対象語ごとの得点に注目して分析を行うこととした。

文脈中の語意情報の有無の分類は、日本語教育を専攻する大学院生2名と筆者とで判定した。判定が異なるものについては、協議により一致させた。

対象語ごとの分析では、各調査対象者の得点のばらつきが大きかったため、代表値としては平均値ではなく中央値を用いることとした。

## 1.4 結果

### 1.4.1 内容理解

内容理解問題の結果を表4の通りである。この結果から、各対象者の内容理解に大きな差は見られなかった。よって、内容理解には差がないものとして研究課題の分析、及び考察を行うこととする。

表4 内容理解問題の結果

	S1	S2	S3	S4	S5	平均点	標準偏差
講義1 (5問)	4	4	2	3	4	3.40	0.89
講義2 (5問)	2	4	3	3	4	3.20	0.84
講義3 (5問)	5	5	5	5	4	4.80	0.45
講義4 (15問)	10	10	12	10	7	9.80	1.79
全体	21	23	22	21	19	21.20	1.48

S：調査対象者

### 1.4.2 研究課題の分析

各対象者の得点の伸びに関する結果は図1の通りである。S3を除いて4名の対象者は、語意の説明がある語のほうがよりよく語彙知識を深めていることが明らかとなった。

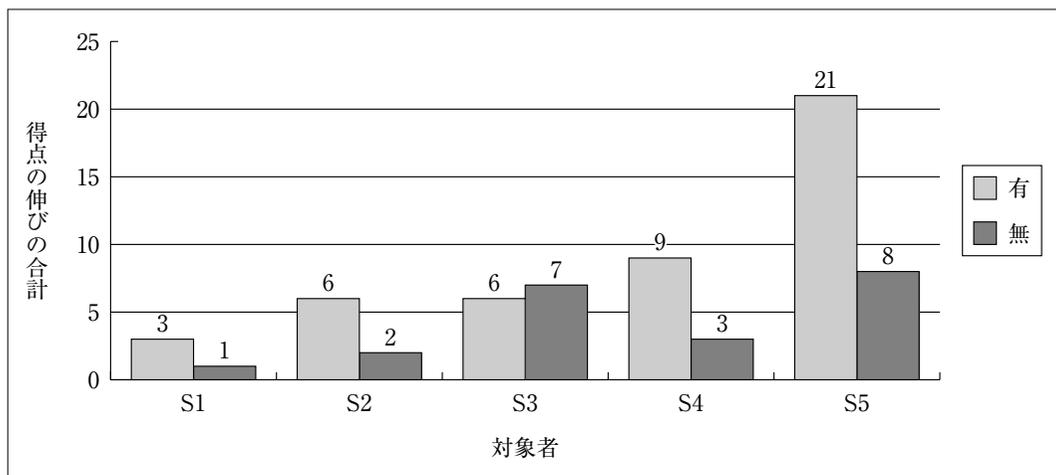


図1 各対象者の事前テスト～直後テストへの得点の伸び

S：調査対象者

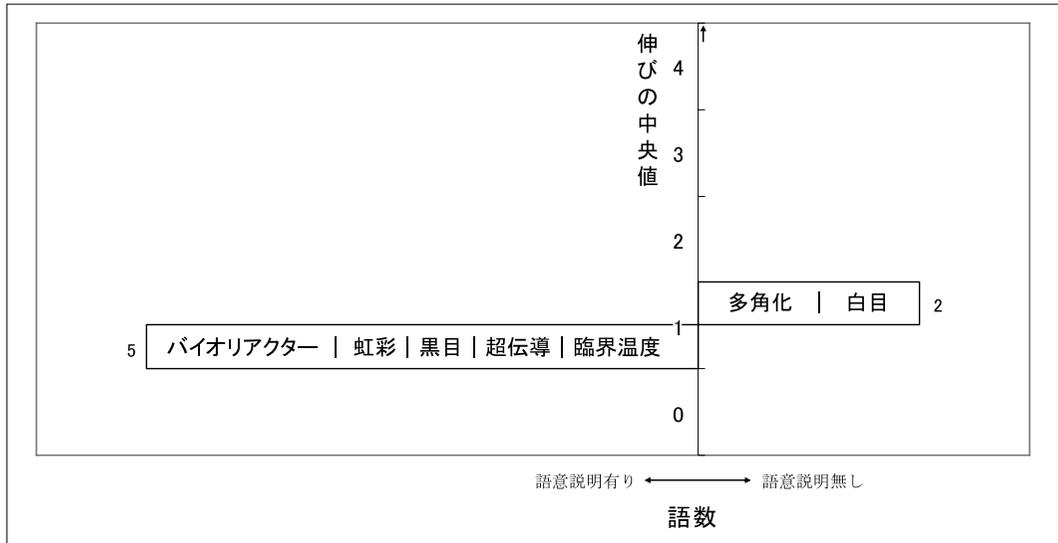


図2 対象語ごとの事前テスト～直後テストへの得点の伸び（中央値）

対象語ごとの得点の伸びに関する結果は図2の通りである。語意の説明がある条件では、「臨界温度」「超伝導」「黒目」「虹彩」「バイオリアクター」の5語が対象者5名の中央値が1であった。語意の説明が無い条件では、「多角化」と「白目」の2語が5名の中央値が1であった。その他の語は、中央値が0とまったく語彙知識は深められていなかった。

### 1.5 考察

各対象者の得点の伸びと対象語ごとの得点を分析した結果、5人中4人の調査対象者が語意説明のある場合に、より得点を伸ばしていたこと、そして対象語に注目した場合でも語意説明がある語のほうが得点の伸びた語数が多かったことが明らかとなった。このことから、概して語意の説明があるほうが語彙知識は深まると言える。

しかし、中には対象者S3のように語意説明があっても無くても成績が変わらない者もいた。これは、S3が語意説明のある語に関しては事前テストの段階で既に知っていたため、伸びにくかったことによると考えられる。S3のデータを詳細に分析したところ、S3は語意説明がある語に関して、事前テストの段階で「以前にこの語を見た／聞いたことがあるが、意味は分からない」と答えている語が多く、直後テストでも同レベルを回答していたため伸びが見られなかった。語意説明が無い語に関しては、事前テストで「以前にこの語が見た／聞いたことがあるかどうか思い出せない」という未知語レベルであると回答した語を直後テストでは「以前にこの語を見た／聞いたことがあるが、意味は分からない」レベルまでに得点を伸ばしたものが多かった。このため、この対象者は語意説明がある場合でも無い場合でも同程度の伸びに留まったと見られる。附随的語彙学習は少しずつ知識が累積していくものであるから (Nagy, Anderson & Herman 1987)、この結果は学習者自身が知っていると認識がある語の場合にはそれ以上の段階に進むのはなかなか難しい、ということを表しているのであろう。

S5は他の対象者より語意説明がある場合にかなり得点を伸ばしている。これは日本語の音韻

処理能力が関係あると思われる。本研究は授業内のデータ収集のため日本語能力を統制することは難しく、この点を検証することはできないが、S5は日本語能力試験の1級も取得しており、授業中の様子から言っても他の対象者より音韻処理能力が高い印象があった。日本語の音韻処理能力が高い方が文脈中にある語意説明というリソースを十分活用できるため、語意説明がある場合のほうが無い場合よりも語彙知識をより深めていける可能性がある。

語意説明がある語のほうが無い語より語彙知識を深められそうではあるが、中には「多角化」「白目」のように語意説明が無い条件下でも語彙知識を深められている語も見られた。そこでどんな文脈で出現しているのかを見ることとした。

「多角化」は、次のような文脈で出現した。

例) 社名は同じでも、業容、つまり仕事の中身ですね、それがまったく変わってしまった会社もあるしですね、社名を変更した会社も多いんですよ。「花王石鹼」って会社、あるでしょ。あれ、60年に、社名を変えて「花王」だけにしたんです。事業の内容を多角化するということで、「石鹼」を取ってしまったんです。

このように「多角化」を取り囲む文脈には、直接的な意味の説明はない。しかし、「仕事の中身が変わる」ので「社名から石鹼を取ってしまった」という具体的な内容から、直接的な意味の説明が無くても理解しやすかったのかもしれない。ただし、得点が伸びたとはいえ、明確に意味を捉えるまでにいたっておらず、ほとんどの対象者が未知語レベルから「聞いたことがある」レベルへの伸びであった。意味を覚えるまでには情報が足りなかった可能性がある。

「白目」については、次の文脈で出現した。

例) 人間の目の構造っていうのは、日本人の場合でしたら、いわゆる白目と黒目に分かれていますね。

本研究の対象者は白と黒は当然既習である。上記のように、「白目」は目の構造の説明をしている文脈で意味的に対照となる「黒目」と並んで出現していることから、「白目」の意味が分かり、語彙知識を深められたのかもしれない。実際対象者のデータを見たところ、「聞いたことがある」レベルから「意味が分かる」レベルに得点を伸ばしている者がいた。直接的に語の意味を定義づけるような説明がなくても、他の語やトピックから意味推測可能となり、またその語やトピックからの連想が頭の中に検索ルートを作った結果、語彙知識を深められたのかもしれない。

## 1.6 まとめと今後の課題

本稿では、L2聴解での附随的語彙学習において文脈中の語意情報の有無が語彙知識を深めることに影響するかについて、徳田（2008）のデータを再分析し、考察を行った。その結果から、以下のように仮説を立てる。

(1) L2聴解において、文脈中の語意の説明は、無いものよりはある語のほうが語彙知識は深めていける。

- (2) 日本語の音韻処理能力が高い者は、よりいっそう文脈中の語意説明を有効に活用して語彙知識を深めていける。
- (3) 明確な説明が無くとも、具体例が分かりやすい場合や、他の語やトピックから意味を絞り込んでいけるような文脈の場合には、そうした情報によって頭の中で検索ルートが作られることで語彙知識が深まる。

本研究は調査対象者が5名と非常に小規模なデータであったが、L2聴解での文脈中の語意情報の有無が語彙知識を深めることに影響する傾向を示すことができた。この結果を一般化することができるよう、今後は対象者の数を増やし、更に日本語の音韻処理能力という観点も取り入れ、実験的に検証したい。

### 参考文献

- 徳田恵 (2008) 「講義を聞くことで付随的語彙知識は深まるか? —大学初年度一学期目の留学生を対象に—」日本女子大学紀要文学部第58号18-25
- 谷内美智子 (2003) 「付随的語彙学習に関する研究の概観」『第二言語習得・教育の研究最前線』日本語文化学会78-95.
- 豊田弘司 (1995) 『記憶を促す精緻化に関する研究』風間書房
- 谷内美智子・小森和子 (2009) 「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果 —語彙的複合動詞を対象に—」日本語教育142号113-122
- Nagy, W. E., Anderson, R. C. & Herman & P. A. (1987) Learning word meaning from context during normal reading, *American Educational Research Journal*, 24, 237-270.
- Paribakht, T. S. & Wesche & M. (1997) Vocabulary enhancement activities and reading for meaning in second language vocabulary acquisition, In Coady, J., and Huckin, T., (Eds.) *Second Language Vocabulary Acquisition: A Rational for Pedagogy*, Cambridge: Cambridge University Press, 174-200.

### 【資料】

対象語と語意説明の有無

語意説明がある対象語	語意説明が無い対象語
臨界温度	本質的
超伝導	便宜的
アルミニウム	搭載
電気抵抗	一眼レフ
磁器	経営戦略
セラミック	繊維
バリュウチェーン	比重
価値連鎖	多角化
業種	名門
分業	垣根
瞳孔	白目
虹彩	種明かし
瞳	構造
利己的	酵素
黒目	食糧
品種改良	酵母
バイオリクター	大腸菌
センダイウイルス	栄養失調
	培養

## 2. 強意・程度を表す命題内副詞のコンテキストとの関係

伊藤 誓子

### 2.1 はじめに

本稿では、文章中で使われる「強意・程度」を表す副詞に焦点を当て、読解する上での意味の捉え方について考える。伊藤（2008）では、モダリティを表す「真偽判断」の副詞を取り上げ、文章上の意味や位置の特徴をみた。そして、多くの場合、真偽判断の副詞は、コンテキストの流れの中でその真の意味が理解されることを確認した。真偽判断の副詞は中右（1980）の分類において命題外の副詞に属する<sup>1)</sup>。一方、「時・アスペクト」、「場所」、「頻度」、「強意・程度」、「様態」の副詞は、命題内副詞である。中右（1980）で、命題外副詞は、「モダリティを表明することはあっても、命題の一部となることは決してない。」(p.161)とされ、命題内副詞は、「命題の一部を形成することはあっても、それ自体でモダリティを表明することはない。」と述べられている。モダリティの本来の性質は「発話時における話者の心的態度を叙述したものである。」(p.159)とする。命題外副詞がモダリティを表すという特徴があるのと対照的に、命題内副詞はこの性質を持たない。このように、モダリティ表現か否かが命題外、命題内を分ける基準となっている。だが、命題内副詞のうち、強意・程度の副詞の一部にモダリティを持つと考えられる語が含まれていることに気づく。本稿では、強意・程度の副詞のモダリティ性を、コンテキストからの理解に重点をおいて検討してみる。

### 2.2 先行研究

命題内副詞に属する強意・程度の副詞を検討する前提として、対照となる命題外副詞と、強意・程度の副詞の性質を見る上での参考となる先行研究について触れておく。

#### 2.2.1 命題外副詞と命題内副詞

命題外副詞のモダリティ性が文章内でどのように現れているかを見るために、伊藤（2008）で真偽判断を表す命題外副詞を取り上げて検討した。例えば、「多分」と「きっと」という副詞は、両語共推量を表すが、「きっと」のほうが「多分」より命題内容に対して確信の度合いが高いと説明するのが一般的である。だが、文章のコンテキストから意味を考えると、更に違いがあることに気付いた。「きっと」には期待が、「多分」には戸惑いの気持ちが含まれており、これを理解することが文章読解に必要であり、コンテキストの把握につながっている。

これに対して、命題内副詞（例1）は、書き手のモダリティに関わらず命題の一部を成すのがその基本的な特徴である。例1に命題内副詞である「頻度」の副詞の例を挙げる。

例1 例えば、フランス人やイタリア人は数を表す場合、まず、右のこぶしを握り、親指、人さし指、中指……の順に立てていき、1、2、3、……を表す。6以上は左手の指に移ることが多い。一方、ものの数を数える場合には、親指から順に立てた右手の指を確かめるように左手で押さえていくことがよくある<sup>2)</sup>。

例1の、よくは、下線の命題内容の一部であり、事実を客観的に示しており、書き手の特別な心情が反映されているわけではない。

このように命題外副詞と命題内副詞は、書き手の気持ちが反映されたモダリティを表す語であるかどうか、命題を客観的にとらえているか否かが、類別する基準となっている。

## 2.2.2 先行研究と本稿での仮説

副詞をそのモダリティ性との関係において言及している先行研究を挙げ、本稿の検討方向について記す。

中右(1980)では、副詞を「モダリティを命題から区別する一般的な枠組みの中に位置づける」ことを目標とし、「命題外副詞(モダリティの副詞)と命題内副詞とを区別する論拠を、語順を含む形の上を求める」(p.167)ことを目指している。個々の副詞のモダリティ性を文単位で命題との関係において探っている。その結果、副詞は、命題外、命題内に分類されている。そのうち、強意・程度の副詞は、命題内副詞に分類されており、例として、次の語が挙げられている。(英語例は省く。)

全然、決して、すこし、ちょっと、まったく、ただ単に、完全に、絶対に、たいへん、たいそう、本当に、非常に、かなり、もっと、最も、はなはだ、なかなか、なんとなく、きわめて、ほとんど、あえて、あくまで(も)、到底、たとえ、仮に(も)、いかにも(p.166)

そして、問題点として、「強意の副詞と程度の副詞を分ける明確な論拠が求められる。」ということ、「強意の副詞は、概して、命題外副詞(モダリティの副詞)とするのが妥当と思われる理由がある。～略～しかし、この問題には別個の詳論がある。」(p.166)ということが述べられている。本稿では、中右の分類に沿いつつ、文章の流れの中での強意・程度の副詞の在り方をみることにする。

文章の中での副詞の働きを検討している研究に長田(1984)の「誘導副詞」のうちの「態度の副詞」がある。「態度の副詞」の例としては、「きっと、けっして、たとえ、もし」が挙げられている。このうち、「けっして、たとえ、もし」は、中右の分類では命題内に、「きっと」は命題外に属する。長田は分類基準を『国語構文論』<sup>3)</sup>から取り、「誘導対象の素材表示部の意義が、ある事態の第三者的な記述であるのに対し、誘導副詞の素材表示部の意義は、その事態を当事者的に評価したものであるという。ということは、誘導副詞の素材表示部の意義に対する当事者的評価を示したものであるということである。」(p.349)と述べている。この「当事者的評価」という説明は、中右の「真偽判断」に通じ、モダリティ表現に関連した語である可能性を示唆していると考えられる。

また、森山(他、2000)では、程度副詞について、「程度副詞の『程度』は、単なる〈状態量〉ではないのである。深入りできないが、程度副詞は、一方で評価副詞に接し、他方で数量副詞や数量名詞(数詞)に接する、なかなか複雑な語群なのである。」(p.226)とあり、ここでも程度を表す副詞があいまいな類に属することがわかる。程度副詞がモダリティを伴って使われる語であるという指摘は仁田(2002)にも窺え、「へんに虚しい」「妙にやさしい」などを挙げ、「形容詞を修飾することによって、その程度性に関わってくるものの、程度性を、度合いの観点からというよりは、評価的な捉え方の観点からを限定したもので、モーダルのな評価副詞につながって

いく。さらに、この類は、よりモーダルな副詞への傾きを持つ『実ニ、本当ニ、誠ニ』につながっていく」(p.160)という記述がある。

森田(2006)では、「ずいぶん」と「なかなか」と「非常に」の副詞が「髪が長くてうっとうしい」、及び「素敵だ」を修飾する文を挙げて、「前に一つ副詞が入ることによって、客体界の状況描写ではなく、それを受け止める主体の側の心理状態を評価判断という形で主張する心の表明となる。」(p.32)とし、それぞれの副詞が与えるニュアンスの違いを説明した上で、「たった一つの副詞にすぎないが、表現に占める重要さは量り知れない。それは、対象の問題ではなく、それを受け止める表現者の心の有り様を伝える働きのためだからである。」(p.32)と述べる。

これらの先行研究から、強意・程度の副詞は、客体化され、命題の一部を成すという命題内副詞の持つ特徴の範囲に収まらず、モダリティを表現し、命題内の他のことばと区別される語であるという仮説を立てることができる。

### 2.3 強意・程度を表す命題内副詞の検討

表1に、留学生を対象としたクラスで扱った日本語読解教材中<sup>4)</sup>に使われている強意・程度の副詞を示す。命題内副詞は、例1に挙げたように命題内容の一部を形成するものであるという点で命題外副詞と区別され、命題内容に対する書き手の心理(モダリティ)を示す語ではない。例2は説明文に出てくる強意・程度の副詞の例である。□の副詞は、それぞれ「割合」、「総量」がどのくらいかという程度を表しており、客体的な事実を示している。

例2 短眠、長眠の違いは、睡眠の量だけでなく、質の違いでもある。短眠は深いノンレム睡眠の割合がもともと多い。(略)また、短眠でも長眠でも深いノンレム睡眠の総量はほとんど同じである。(資料①「睡眠時間—短眠と長眠」3段落)

次に、例3のよけいにと例4のせめてという強意・程度の副詞について見てみる。例3では「何もない」と考えることで、「(のどの) 渇き」や「空腹」の程度が高まることをよけいにという副詞によって示しているが、このことばは、単に程度を表すだけではないということが、段落全体を読んだときに気づく。〈海外のホテルに泊まっている→夜中にのどが渇いたり空腹感が募る→しかし、冷蔵庫も、買いに行く場所もない→よけいに渇きや空腹が切実になる〉このコンテキストから、書き手の切実な渇き・空腹への不安が伝わってくる。よけいには、「もっと」という語と同義に使われる語であるが、程度を表すだけでなく、この文章中では馴れない状況での書き手ののどの渇き・空腹感の増幅を強調しており、客体的に単に事実を示す例2の副詞とは違う意味合いを加えている。

書き手の心情が強調され、モダリティが表現されているという点では例4も同じである。せめては最小限の確保を希望するときに使われる語である。普通、「(せめて) ~たい」など希望を示す表現と共に使われることから、書き手の心情抜きでは使えない語であることがわかる。書き手の心理を表明しているという点で、他の命題内副詞と異なる。

例3 海外旅行をしていて急に不安を覚えるときがある。冷蔵庫もないホテルで夜中にのどが渇いたり、空腹感が募ってきたりしたときだ。何もないと思うとよけいに渇きや空腹が切実になる。そんなとき、街にはコンビニもないのだ。(資料②「天声人語」1段落)

例4 「喪失の喪失」を言われたときがあった。「何かがない」という喪失の感覚を喪失した豊

かで便利な時代についての形容である。携帯電話やコンビニに依存する日々を送りながら、**せめて**「喪失」への感覚は失わないでいたい。(資料②「天声人語」5段落)

例5には**なにも**、**べつに**、**さらさら**の3語がある。資料③の文章には、強意・程度の副詞が8箇所あり、その一部である。〈遺産らしきものは**なにも**残してもらえなかった→(しかし)**べつに**財産を残してもらいたいという気持ちは、**さらさら**無い〉、という流れである。**さらさら**は、可能性がゼロである意味をもち、読み手の予想(遺産に対する期待)をはっきり打ち消す意味合いがある。この語に伴う書き手のモダリティは、コンテキストを理解した上で読み取れる。**べつに**の語にも読み手の予想外に「～という気持ちはない」ということを強めるニュアンスがある。

一方、例6は、方言における発音の特徴を事実即して説明しており、副詞表現**あまり**(区別をしない)・**わりと**(はっきり区別する)もその一部を担う役割を担っており、書き手の心情が反映されているわけではない。例5と例6には、共に強意・程度の副詞が使われているが、モダリティ性の点では違いがある。

例5 ぼくの両親は、父も母も師範学校を出て、学校の教師をしていた人間なのですが、敗戦後、外地から引き揚げてきたこともあって、遺産らしきものは**なにも**残してもらえませんでした。**べつに**財産を残してもらいたいなどという気持ちは**さらさら**ないのですが、でも、父母の思い出になる形見の品ひとつぐらいいは、とときおり思うこともあります。(資料③「方言は父や母からの贈り物」5段落)

例6 たとえば、いまの日本語では**あまり**区別をしません、九州や西日本においては〈おとくを〉という発音を**わりと**はっきり区別する習慣がありました。あるいは〈か)とくわい)を区別して言ったりする。(資料③「方言は父や母からの贈り物」7段落)

資料④には7箇所、強意・程度の副詞が使われている。それぞれを辞書<sup>5)</sup>の意味とともに示す。

よく : 望ましく好ましい様子。プラスイメージの語。

なんの : 後ろに打ち消しや否定の語を伴って、関係する物事が存在しない様子を表す。ややマイナスよりイメージの語。

この上なく : 此の上ない=これに勝るものはない。これ以上ない。

とりわけ (2箇所) : 程度のはなはだしいものの中で、特に著しく程度がはなはだしい様子を表す。プラスマイナスイメージはない。ある範囲の中で、一部のものの程度が特に高いというニュアンスで用いられる。

せめて : 最小限の確保を希望する様子を表す。ややマイナスよりイメージの語。

おおいに : 程度がはなはだしい様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。

このうち、4個の副詞が2段落に集中して使われている。(例7)

例7 茶・紺・グレイ、どのズボンとも**よく**合う。ネクタイを締めれば、インフォーマルな衣装として**なんの**不足もないし、Tシャツの上に羽織れば、カジュアルとしてわるくない。**この上なく**重宝で、旅行のときは…**とりわけ**海外旅行のときには、必ずといってよいほど頻繁にこれを利用した。海外取材の写真を見れば、ほとんどの場合、私はこれを着て写っている。(資料④「物のこころ」2段落)

例7の段落では、書き手にとって愛着があり、古くなくても手放せないジャケットについて描

写している。文章全体の冒頭に近い部分（2段落）で述べられ、その後の展開では、古びてしまったが「品物にも心がある」との感覚からジャケットを捨てられずにいるという内容になっている。

例7の段落では、対象の愛用品（ジャケット）が書き手にとって非常によいものであることを示すために副詞が効果的に使われている。物の良さを強調することで、古くなって使えなくなってきたことへの残念さが伝わる。強調の意味を持つ副詞の選択や数の多さも、そのような文章展開につながる伏線の一部となっている。これらの副詞は客体的に事柄を強めて提示しているというより、品物（ジャケット）に愛着がある書き手が、やや主観的にできる限りそれを良いものとして示そうとしているニュアンスが伝わるし、その後の文章の流れへ導く技術が感じられる。ここに示した副詞は、モダリティを伴った表現であると言える。

以上、命題内副詞で強意・程度の意味を持つと分類された語の中には、モダリティを表し、書き手の心情を伝えようとしている語があることがわかった。つまり、強意・程度の副詞には、他の命題内副詞と同じく、客体的に命題内でその機能を果たしている語と、それに加えてモダリティを表現し、コンテキストから読みとらなくてはならない語の2種類があることがわかる。その2種類を、他の例で検証してみる。資料⑤は作者が子供のころの正月の思い出を書いた随筆である。表1で示したように、資料⑤には18箇所強意・程度の副詞がある。3・4段落を例8に示す。文中の副詞は強意・程度の副詞である。この段落の前の2段落には、正月三箇日、来客に追われ、家族皆が大変な忙しさであることが書かれている。3段落に「母は私をつれて叔父叔母のところへ挨拶にゆく。」のは、ようやく「七草過ぎ」にできることで、また、やっと「つまらないけれど穏やかな毎日が始まる」とある。ようやく、やっとには、待ちくたびれた気持ちが表現されており、先の2段落にそのような気持ちを起す原因となる事柄が書かれている。これらは、モダリティを伴う副詞で、先行する展開を踏まえて使われている語である。また、そんなには、その前の文にあるように、母の小言の程度がはなはだしいことを強調し、戸惑いの気持ちを示すのでモダリティを表すと言える。これらの副詞に対して、4段落の、最も（気が重い）、およそ（得手でない）は、事実を客体的に提示することに重点が置かれていて、モダリティ表現とは区別される。

例8 来客が少くなる七草過ぎになって、ようやく母は私をつれて叔父叔母のところへ挨拶にゆく。和服は着馴れず、やれ、袖をぶらぶらさせるな、背中は真直ぐにしろ、きよろきよろするな、電車の乗り降りに裾をひきずるな、霜でぬかるんだ道の泥はねをあげるな。出るから帰るまで世話を焼き切れないと母は嘆くが、そんなに次々に覚えられはしない。女の正月十日過ぎとはよく言ったもので、その頃になって、やっとつまらないけれど穏やかな毎日が始まるのだ。（資料⑤「正月」3段落）

そういう騒ぎの中で、最も気が重いのは、二日の稽古始めの日だ。手習い、ひき初め、縫い初め、およそどれも得手でないことだらけ。中でもお手習いは大嫌いだ。（同4段落）

以上より強意・程度の副詞は、次のように二分される。以下に、それぞれについて本稿で取り上げた副詞の例を挙げる。なお、表1のうち、本稿の例には挙げていない語を（ ）内に示す。

A：命題内の一部を成すが、モダリティ副詞であり、コンテキストからその意味を読み取る必要がある語

よけいに せめて なにも べつに さらさら よく なんの この上なく とりわけ

ようやく そんなに やっと (じつに 少しでも 非常に とても おおいに もっと  
 まさに ひどく ますます いよいよ ちっとは 相変わらず)

B：命題内の一部の意味を示すことが主な機能であり、特にモダリティを表さない語

ほとんど あまり わりと 最も およそ (すべて もし)

ここに挙げた例語の分類は、本稿で扱った資料以外の他の文章中での使い方も比較検討した上で確定する必要がある。しかし、傾向としては、強意・程度の副詞のうち、特に強意の副詞は、命題内の一部を形成しながらもモダリティを表現する性質を持つ語が多いことに気づく。

表1

タイトル (文字数・ジャンル)	強意・程度の副詞 (文章出現順)	⑤正月 (3736字・随筆)	ようやく そんなに やっと 最も およそ そんなに もっと すべて まさに ひどく 少しでも ますます 少しでも ますます いよいよ ちっとは 相変わらず もし
①睡眠時間—短眠と長眠 (713字・説明文)	ほとんど		
	もっとも		
	もっとも		
	ほとんど		
②天声人語 (625字・意見文)	よけいに		
	せめて		
③方言は父や母からの贈り物 (1486字・随筆)	じつに		
	少しでも		
	非常に		
	とても		
	なにも		
	べつに		
	さらさら		
	あまり		
	わりと		
④物のこころ (1397字・随筆)	よく (合う)		
	なんの		
	この上なく		
	とりわけ		
	とりわけ		
	せめて		
	おおいに		

## 2.4 まとめ

文章が単なることばの集まりではなく、まとまりのある内容を伝える単位であることから、それを成立させている語には文法的にも内容的にも何等かのつながりがある。副詞についても、前後のことばと相まって使われていることが改めて確認できた。そして、その関わり具合が、命題

外副詞か命題内副詞かによって違い、前者がモダリティを表現しているのに対して、後者は命題の一部を成し、事柄を伝える要素の一つとしての機能を持つ。だが、命題内副詞に属する強意・程度の副詞のうち、特に強意の副詞については、命題内副詞の機能をもちつつ、書き手の心情が込められている語もあり、モダリティを表現している副詞とみなすことができ、その意味は個々のコンテキストを理解したうえで生きることがわかった。

副詞の意味の理解は、文章の深い読み取りにつながり、読解力向上に役立つと考える。なお、本稿での語の分類は、今回対象とした文章中での現れ方から分けたものである。今後は、更に多くの文章を対象として分析し、より詳細で明快な分類を目指したい。

## 注

- 1) 命題外副詞として、中右(1980)に、価値判断、真偽判断、発話行為、領域指定、接続副詞が挙げられている。
- 2) 本稿筆者が人間社会学部日本語 I a で扱った教材(「手で数と表す」『留学生の日本語①読解編』アルク2001)の文章の2段落。下線、囲みは本稿筆者が付した。
- 3) 渡辺実『国語構文論』1988 塙書房
- 4) 人間社会学部日本語 I a で扱った読解教材の一部である。
- 5) 『現代副詞用法辞典』の解説から引用。「この上なく」のみ『広辞苑』から。

## 参考文献

- 伊藤誓子(2008)「モダリティを表す副詞のコンテキストとの関わり」日本女子大学紀要文学部第57号(「留学生科目における語彙指導」) pp.35-40
- 伊藤誓子(2009)「文章理解における真偽判断を示す副詞の機能」日本女子大学紀要文学部第58号(「留学生科目における語彙指導の研究」) pp.26-31
- 中右実(1980)「文副詞の比較」日英語比較講座第2巻『文法』 國廣哲彌編著 大修館書店
- 長田久男(1984)『国語連文論』和泉書院
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 飛驒良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 森田良行(2006)『話者の視点がつくる日本語』ひつじ書房
- 森山卓郎、仁田義雄、工藤浩(2000)『モダリティ』岩波書店

## 資料

- ① 井上昌次郎「睡眠時間—短眠と長眠」(『留学生の日本語①読解編』アルク2001から)
- ② 「天声人語」(『朝日新聞』2004.9.4)
- ③ 五木博之「方言は父や母からの贈り物」(『大河の一滴』幻冬舎文庫1999から)
- ④ 阿刀田高「物のこころ」(『日本語上級読解』アルク2000から)
- ⑤ 青木玉「正月」(『小石川の家』講談社文庫1994から)

### 3. パラレルコーパスによる日本語DDLの試み

田 辺 和 子 (日本女子大学文学部日本文学科)

中 條 清 美 (日本大学生産工学部教養・基礎科学系)

#### 1. はじめに

本研究は、2008年度日本女子大学文学部紀要58号「留学生科目における語彙指導の研究：パラレルコーパスの教育的利用におけるコロケーションの一考察」に引き続いて、日英パラレルコーパスの実践的教育的利用を試みた研究報告である。本研究で使用しているコーパスは、「日英新聞記事対応付けデータ」(内山、井佐原2003)である<sup>1)</sup>。今回は、昨年度作成した教材、キーワード「実施」を中心とした練習問題を実際に日本語指導に利用した結果を踏まえて、その反省のもとに内容・形式ともに改訂し<sup>2)</sup>、さらに「消費」においても問題を作成してみた。

2008年度の「パラレルコーパスの教育的利用におけるコロケーションの一考察」の練習問題の問題点として、まず内容については、対象とするレベルがかなりの上級であり、問題の利用対象者が狭くなりすぎるといえる点である。元来、この教材開発の目的は、従来の日本語教育における新聞記事の教材としての使用をもっと早くに導入することであった。新聞は、学習者が強い関心を持つ対象でありながら、語彙の難しさのために、実際に授業で利用するのは、中級後半から上級になっているのが現実である。この状況を改善すべく、学生の関心が失せてしまわないうちに、実生活の言語素材を日本語の授業に取り入れようというねらいが本研究の直接的な動機である。この目的のためには、対象レベルが中級中期程度より上であってはならない。そこで、今回は質問の平易化に努めた。

形式においては、元の練習問題では、後半の応用問題では、前半に既に提示してある複数のコンコーダンスライン(コーパスの検索結果)画面を総合的に見て答えることを想定したので、特に個別のコンコーダンスライン画面をつけなかった。これに対して、被験者から「やりにくい」という反応があったので、検索結果画面は個々の問題にそれぞれ付けることにした。

形式における第2の改訂点というのは提示する例文の数を10から25の幅の中で収めたことである。あまりに少なくとも練習が単純になるが、例文が多くても読み取る時間と労力の負担ばかり増え、使ったエネルギーのわりにやり遂げた仕事(タスク)が少ないという達成感をすぐ効果を学習者にもたらず事を考えると、10から25が適切かと現段階では考えている。これら一連の実践経験を通して、優れた練習問題というのは、学習者が練習全体にある一定のリズムを持って行うことができるように考慮されるべきであると考えた。

#### 2. 操作上の問題点

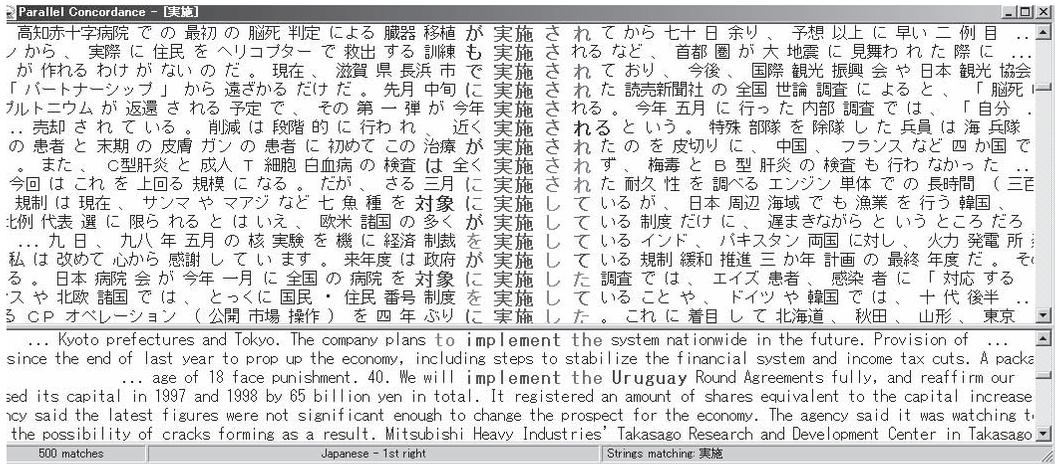
##### 2.1 ソートについて

パラレルコーパスでは、画面1のようにキーワード(検索語)を指定して得られた検索結果を、キーワードを中心に、左右どちらにどれだけ隔たった語を基準に例文を並べるかソート位置を指定することができる。これにより、たとえば、以下のような使い方ができる。1Rすなわち1st

Rightというのは、キーワードの向かって「右1つめ」の語を揃えるという指示であり、2Rすなわち2nd Rightはキーワードの「右2つめ」を揃える操作である。同様に1Lすなわち1st Leftというのは、「左1つめ」の語を揃える指示である。

画面1ではソート位置を1Rすなわち「右1つめ」にして検索ボタンをクリックする。すると、ソート位置として指定した、キーワードの右1つめの語を基準にソートされ、それぞれの例文がアルファベット降順に並んで表示される。

### 【画面1】1st Rightというソート指定

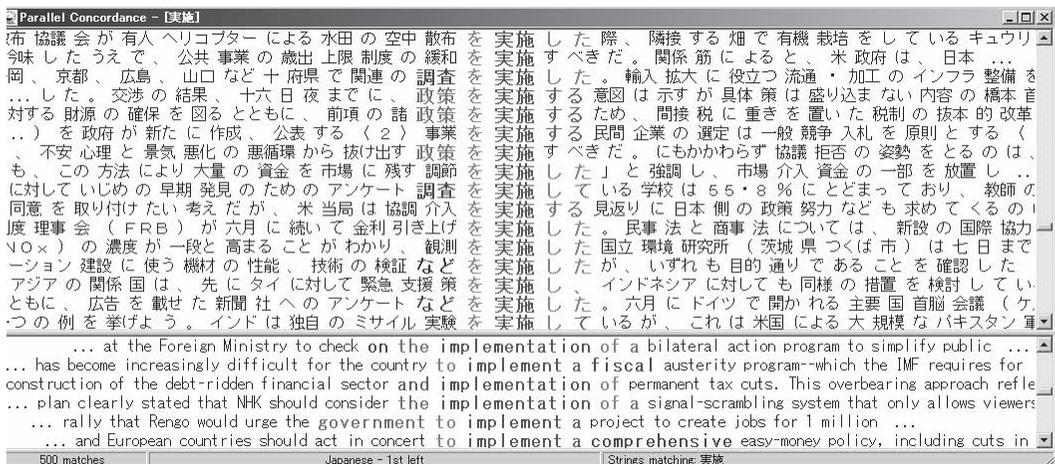


1st Rightという指示は、キーワード右端の語句を揃えることである。

1st Right

C	(キーワード)	A
D	(キーワード)	A
E	(キーワード)	A

### 【画面2】1st Leftというソート指定

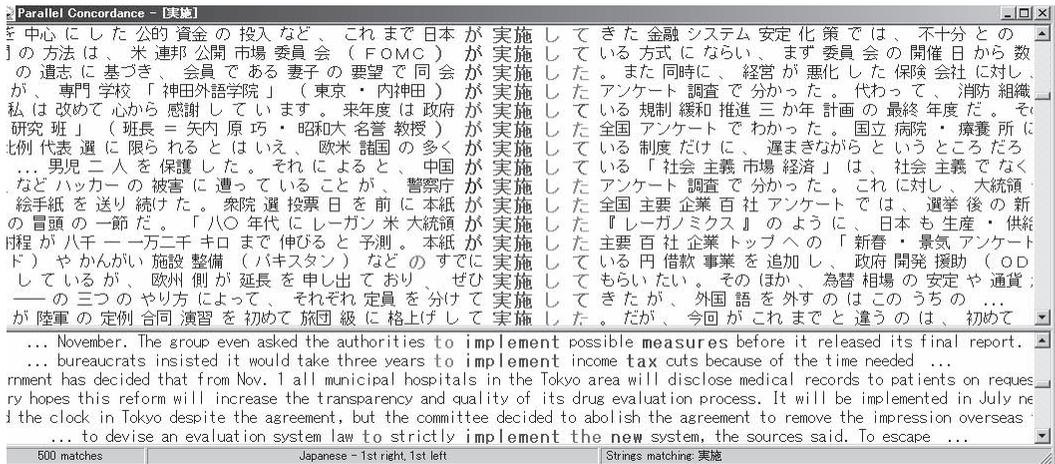


1st Leftという指示は、キーワード左端の語句をそろえることである。

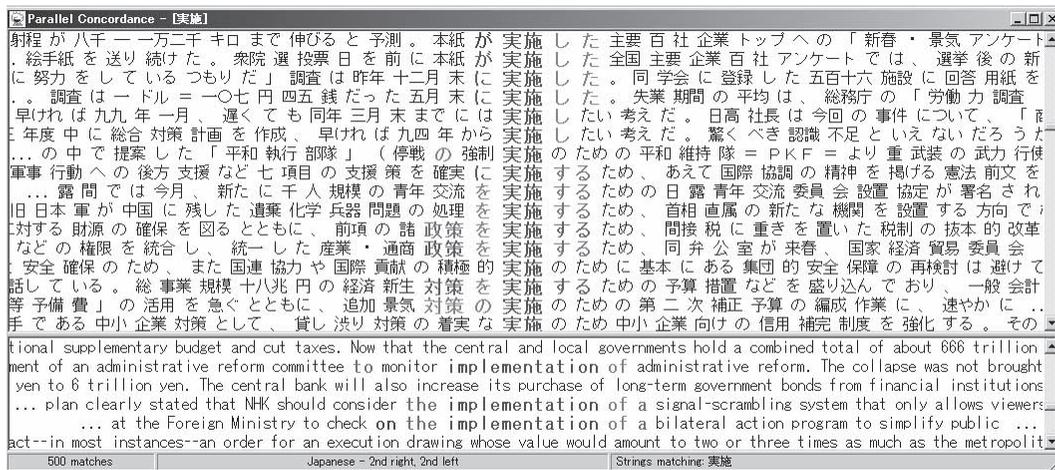
A	(キーワード)	C
A	(キーワード)	D
A	(キーワード)	E

【画面3】のようにソートの種類を1R1L (1st Right, 1st Left) とすると、ソートの第一優先順位をキーワードの右1つめの語として、続く第二優先順位をキーワードの左1つめの語として並べ替えて表示することもできる。【画面4】では2R2Lとして、ソートの優先順位を順に「右2つめ」「左2つめ」とした結果のコンコダンスライン画面である。

【画面3】 1st Right 1st Leftというソート指定



【画面4】 2nd Right 2nd Leftというソート指定





(A) 実施が動詞として用いられる例

実施する

実施するための ③

実施する 引き続き圧力をかけていく

② を実施する

を 実施する

を 実施する

実施 ①

実施 ④ とともに

実施 ⑤ 日本の食肉牛の検査基準は

(B) 実施が名詞として用いられる例

の 実施

の 実施

実施を ⑥

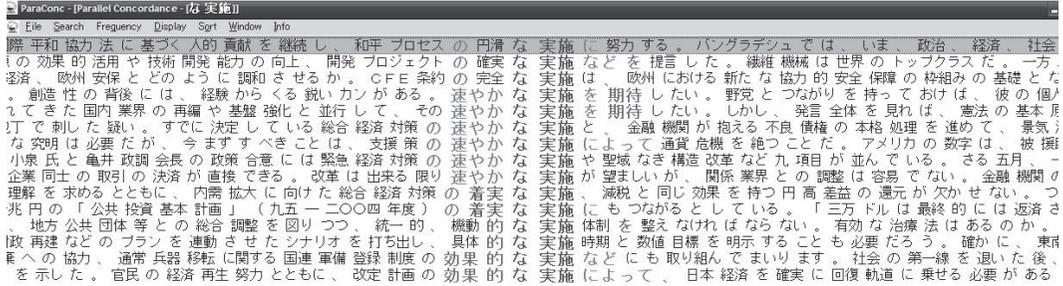
実施を ため

【解説1】

- ①では、実施する—実施される のボイスのちがいによる使用に学習者の注意をむけるねらいがある。
- ②では、他動詞であることを確認している。
- ③「実施するための努力」が正解だが、ここでは「努力」を修飾する連体修飾「外の関係」の例であることを認識させる目的である。  
「実施する」という動詞と複合助詞の組み合わせを認識させようとするねらいがある。
- ④動詞「実施される」と共起しうる複合助詞「とともに」の紹介が目的である。
- ⑤「実施される検査」という連体修飾「内の関係」が理解できているか問う問題である。
- ⑥「実施を」と共起しやすい動詞を認識させる。ここでは「期待する」「促す」が正解。

問題2 下の【画面6】をみて、後の問題の下線部を埋めなさい。

【画面6】実施 1st Left, 2nd Left, 1st Rightの場合



(A) 実施と結びつきやすい「な」形容詞

- \_\_\_\_\_ ① \_\_\_\_\_ な実施  
 \_\_\_\_\_ の \_\_\_\_\_ な実施  
 \_\_\_\_\_ の \_\_\_\_\_ ② \_\_\_\_\_ な実施にかかる費用

(B) 「～的な実施」として使われる表現

- \_\_\_\_\_ ③ \_\_\_\_\_ 的な実施  
 \_\_\_\_\_ の \_\_\_\_\_ 的な実施

改定計画の効果的な実施 \_\_\_\_\_ ④ \_\_\_\_\_、日本経済を確実に回復軌道に乗せる必要がある。

【解説2】

- ①「実施」と頻繁に共起する形容詞群を認識させる目的の練習問題である。
- ②は上記の画面にそのまま記載してある文ではないが、「実施にかかる費用」という内の関係の連体修飾を提示した。
- ③「～的」の整理をする目的の問題である。
- ④画面最下段の文。複合助詞「によって」が正解。

問題3 下の画面を見て後の問題の下線部をうめなさい。

【画面7】は、キーワードを「消費」として1st Right 2nd Leftという設定で引き出した画面である。



問1 適切な名詞をいれなさい。

\_\_\_\_\_ 消費 \_\_\_\_\_ 消費  
 \_\_\_\_\_ の 消費 \_\_\_\_\_ の 消費

問2 適切な形容詞をいれなさい。

\_\_\_\_\_ な消費

問3 ( ) に適切な助詞を入れなさい。

個人消費 ( ① ) 中心 ( ) 明るい兆しが見えてきた。

エネルギー消費 ( ) 主役 ( ) 好調である。

問4 下の枠の中から「消費を」・「消費が」と一緒に使える適切な動詞をいれなさい。

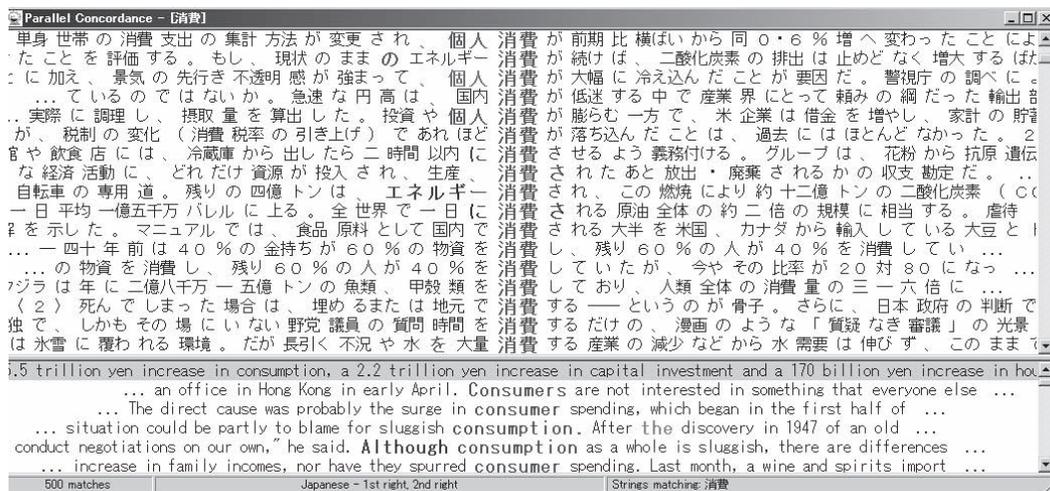
消費を \_\_\_\_\_ ② \_\_\_\_\_ 消費が \_\_\_\_\_ ③ \_\_\_\_\_  
 消費を \_\_\_\_\_ 消費が \_\_\_\_\_  
 消費を \_\_\_\_\_ 消費が \_\_\_\_\_

拡大する	延ばす	伸びる	伸ばす
減る	減らす	刺激する	刺激される
加速する	支える	下支えする	手控える

解説

- ①「～を～に」の構文を問うたもの。「～に」の前は、位置を表す名詞がくる。
- ②・③ 動詞の自他の判別を目的とした問題。次の【画面8】にも「消費が～」に続く自動詞群があるので、それらの語を枠の中の動詞と入れ替えて、もう一度【画面8】で同じ形式の問題を課してもよいだろう。

【画面8】キーワードを「消費」として1st Right 2nd Rightというソート指定



問5 「消費が」に続く動詞部を上表から書き抜きなさい。

消費が \_\_\_\_\_ ①

消費が \_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_ 消費が \_\_\_\_\_ ② 一方で、米企業は借金を \_\_\_\_\_ ③。

問6 次の（ ）に（する・される）のいずれかを適当な形になおして入れなさい。

- 40年前は、40%の金持ちが、60%の物資を消費（ ④ ）。
- どれだけ資源が投入（ ⑤ ）、生産・消費（ た）あと放出・廃棄（ ）かの収支勘定だ。
- 水を消費（ ⑥ ）産業
- 国内で消費（ ⑦ ）大半を米国・カナダから輸入している大豆
- 一億五千万バレルの石油は、全世界で一日に消費（ ⑧ ）原油全体の約二倍の規模に相当する。

解説

問5・問6 とともに、基本的に文の態（ボイス）の判別を問う問題である。

- ①低迷する・落ち込む・膨らむ・冷え込む のいずれかが入ればよい。
- ②画面の文から取ると、「消費が（膨らむ）一方、」となり、

- ③「～を（増やし）」という表現をとっている。「一方」の前後で、変化を表す表現が組み合わさっている。コロケーションを教えるのに適した例文である。
- ④目的語となる「～を」格があるので、「消費する」という他動詞が入る。
- ⑤「消費が」という「が」格があるので、受動態を選択しなければならない。
- ⑥連体修飾節内において「水を」があるので他動詞が入らなければならない。
- ⑦⑧ この二題は、長い連体修飾節であるので難しい問題となっている。文中に具体的な動作者が書かれていないので、大豆・石油それぞれが主語となっていると判断して受動態を選ぶのが正解である。

### 3. まとめと今後の課題

本論文では、コンコーダンスを利用したタスクを作る上で、パラレルコーパスにおける指示の仕方と画面の構成について整理してみた。キーワードの左右の順番とそれぞれ何語まで抽出し並び替えを指示するかで、画面が大きく変わり、それによって構文論的に、意味論的にそれぞれ興味深い言語使用の傾向を考察することができた。問題作成をする側としては指示と画面の様子の関連を熟知し、自由に画面を操作する技術を高めることが、このパラレルコーパスの可能性をより効率よく利用することになることが理解できた。今後の課題としては、実際に現場で使用してみて、学習者の使用上の問題点があるかどうかを知ることである。

英訳が付いていることにより、基本的に英語母語話者が学習対象者として適切かと思うが、日本語コーパス部分だけでも、教材として使えるので本学におけるアジア系留学生にも教材として提供してみる予定である。紙媒体として与えた場合と、実際にコンピュータ画面で学習者自身が操作して答えを探しだす場面との習得度を比較してみても興味深いだろう。コンコーダンスの指示を教師側から丁寧に与えたほうが質問には答えやすいが、学習者が試行錯誤を経て、画面を操作しながら文法ルールを発見できれば、それは日本語の言語構造が理解できたことにもなるので、教材の中のソート指示の取り扱い方については、検討すべき課題といえるだろう。

**謝辞** 本研究は、2009年5月24日に明海大学で行われた日本語教育学会春季大会で口頭発表した内容に基づいて新たに執筆したものである。本論文の執筆にあたり木下謙朗氏、三橋麻子氏、大石明日香氏に大変お世話になりました。また、本研究の一部は平成21-24年度科学研究費補助金 基盤研究（B）（課題番号 21320107）を受けて行われました。ここに記して感謝申し上げます。

### 注

- 1) <http://www2.nict.go.jp/jt/al32/members/mutiyama/jea/index-ja.html> において公開されている。これは、約12年分の「読売新聞記事」の日本語と The Daily Yomiuri の英語文で構成されている。パラレルコーパスとしては、世界最大の規模のものである。パラレルデータを扱うソフトウェアとしてBarlow (2004) のParaConc を使用した。
- 2) 2009年度春季日本語教育学会の発表においても、有益な助言をいただいた。

## 参考文献

- 1) Kučera, H. and Francis, W. N. *Computational Analysis of Present-Day American English*, Providence, Brown University Press, 1967.
- 2) Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., and Finegan, S. *Longman Grammar of Spoken and Written English*, Edinburgh Gate, Pearson Education Limited, 1999.
- 3) 中條清美、西垣知佳子、内山将夫、原田康也、山崎淳史、「日英パラレルコーパスを活用した英語語彙指導の試み」、『日本大学生産工学部研究報告B（文系）』、38, 2005, 17-37.
- 4) 中條清美、西垣知佳子、内山将夫、山崎淳史、「初級英語学習者を対象としたコーパス利用学習の試み」、『日本大学生産工学部研究報告B（文系）』、39, 2006, 29-50.
- 5) 中條清美、西垣知佳子、内堀朝子、「パラレルコーパスを利用した文法発見学習の試み」、『日本大学生産工学部研究報告B（文系）』、40, 2007, 33-46.
- 6) 中條清美、西垣知佳子、内堀朝子、キャサリン・オヒガン、「データ駆動型学習による効果的な英語初級者向け文法指導の試み」、『日本大学生産工学部研究報告B（文系）』、41, 2008, 15-33.
- 7) 中條清美、「コーパスに基づいたシラバスデザインとその実践」、中村純作、堀田秀吾（編）、『コーパスと英語教育の接点』、東京、松柏社、2008, 67-90.
- 8) 中條清美、アントニ・ローレンス、西垣知佳子、内堀朝子、「日英パラレルコーパスを利用した文法学習」、『第47回大学英語教育学会全国大会要綱』、2008, 105-106.
- 9) 丸山岳彦、田野村忠温、「コーパス日本語学の射程」、『日本語科学』、22, 2007, 5-12.
- 10) 深田淳、「コーパス言語学の日本語研究・日本語教育への応用」、*Fifteenth Princeton Japanese Pedagogy Forum PROCEEDINGS*, 2008, 1-18. [http://www.princeton.edu/~eastasia/pjpf/PDF/5%20Fukada\\_PJPF08.pdf](http://www.princeton.edu/~eastasia/pjpf/PDF/5%20Fukada_PJPF08.pdf)
- 11) 内山将夫、井佐原均、「日英新聞の記事および文を対応付けるための高信頼性尺度」、『自然言語処理』、10(4), 2003, 201-220.
- 12) Barlow, M., *ParaConc (A Concordancer for Parallel Texts)*, 2004.
- 13) Johns, T., Contexts: the Background, Development and Trialling of a Concordance-based CALL Program, in Wichmann, A. Fligelstone, S., McEnery, T. and Knowles, G. (eds.) *Teaching and Language Corpora*, London, Longman, 1997, 100-115.
- 14) 田辺和子、伊藤誓子、小長井晃子、「留学生科目における語彙指導の工夫」、『日本女子大学文学部紀要』、57, 2008, 29-46.
- 15) 田辺和子、中條清美、「パラレルコーパスの教育的利用によるコロケーションの一考察」、『日本女子大学文学部紀要』、58, 2009, 32-40.
- 16) Hunston, S., *Corpora in Applied Linguistics*, Cambridge, Cambridge University Press, 2002.
- 17) 投野由紀夫、「教材とコーパス」、中村純作、堀田秀吾（編）、『コーパスと英語教育の接点』、東京、松柏社、2008, 3-19.
- 18) 内山将夫、中條清美、山本英子、井佐原均、「英語教育のための分野特徴単語の選定尺度の比較」、『自然言語処理』、11(3), 2004, 165-197.
- 19) Chujo, K. and Utiyama M., Selecting Level-Specific Specialized Vocabulary Using Statistical Measures, *System*, 34(2), 2006, 255-269.
- 20) 内山将夫、高橋真弓、日英対訳文対応付けデータ、2003。 <http://www2.nict.go.jp/x/x161/members/mutiyama/align/index.html>
- 21) Anthony, L., Concordancing with AntConc: An Introduction to Tools and Techniques in Corpus Linguistics, *JACET Newsletter*, 155, 2006, 2085.
- 22) 国際交流基金、『日本語能力試験出題基準改訂版』、東京、凡人社、2007。
- 23) 国立国語研究所、『分類語彙表 増補改訂版』、東京、大日本図書、2004。

- 24) 石川慎一郎、「言語コーパスからのコロケーション検出の手法 —基礎的統計値について—」、『統計数理研究所共同研究レポート』、190, 2006, 1-14.
- 25) Stubbs, M., *Words and Phrases: Corpus Studies of Lexical Semantics*, Oxford, Blackwell Publishing Ltd., 2002.
- 26) Sinclair, J. M., *Corpus, Concordance, Collocation*, Oxford, Oxford University Press, 1991.
- 27) Thurstun, J. and Candlin, C. N., *Exploring Academic English: A Workbook for Student Essay Writing*, Sydney, National Centre for English Language Teaching and Research, Macquarie University, 1998.
- 28) Boulton, A., DDL Is in the Details.... and the Big Themes, *Proceedings from the 2007 Corpus Linguistics Conference*, 2007. <http://www.corpus.bham.ac.uk/corplingproceedings07/>
- 29) McCarthy, M. and Carter, R., Spoken Grammar: What Is It and How Can We Teach It? *ELT Journal*, 49 (3), 1995, 207-218.
- 30) Sinclair, J. M., Jones, S., Daley, R. and Krishnamurthy, R., *English Collocation Studies: The OSTI Report*, London, Continuum Intl Pub Group, 2004.
- 31) 庵功雄、松岡弘、中西久実子、山田敏弘、高梨信乃、『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、東京、スリーエーネットワーク、2000。